

今回は、前回の「地鎮祭」に続き「上棟式」のお話をしたいと思います。

上棟式は「棟上げ」「建前」などとも呼ばれ、今は見ることが少ない「餅まき」を思い出される方も多いかと思います。地鎮祭は建物を建てる前に、土地をお守りいただいている神さまにご挨拶をし、工事の無事と守護を祈願する儀式ですが、上棟式もまた、神さまの守護に感謝し、工事の成就を祈願する儀式です。

神事は「修葺」に始まり、「降神」、「献饌」、「祝詞奏上」とここまでは地鎮祭と同じです。このあとに「曳き綱」で棟木を棟に上げ、「槌打ち」で棟木を棟に打ち固め、その後災いを祓うために餅や銭を撒く「散餅銭」となります。それから「玉串奉奠」、「撤饌」、「昇神」と進みます。また、この時には中央の柱に御幣を飾ったり、屋根に破魔弓を立てたりもします。しかし今では、棟木を上げた後に、その下もしくは、屋根に祭壇を設け関係者だけで略式の神事をすませる場合も多くなりましたし、全くしないことも少なくありません。

こういった流れの中でも、まだ比較的上棟式を盛大に行うことが多い奈良(大和)地方のお話を紹介しましょう。

「家の始まりは大和から」とも云われ、家造りを大変大切にしている地方で大工一筋56年の大ベテラン棟梁の話です。

上棟式は二日をかけて前建て、本棟上げ式と行うことが多く、前日から親族や近隣の方々からご祝儀と共にお祝いの品として家作りに使う縄、竹、わら、それから赤飯やお餅が届けられます。上棟式の当日には神さまにお供えた紅白の餅を撒き、その後祝宴となります。

奈良地方は伊勢神宮三輪大神さんの信仰が厚く、祝歌、特に「伊勢音頭」は欠かせないそうです。終宴に近づくと大きな三重の盃でお酒をあがり一旦終わりになります。その後お施主さまと職人たち一同が御幣を担ぎ、村中伊勢音頭を唄いながら棟梁の家へ送る習わしがあります。そこで二次会の酒盛りが始まり、朝まで呑むこともあったそうで、それはそれはにぎやかで盛大な宴だったようです。

とはいうものの、昨今ここまで賑やかな上棟式は徐々に少なくなってきているようですが、生活様式、考え方は移り変わっていくものですが、建物の無事な完成を謙虚な気持ちで祈る心は、大切にしたいと思うのです。



御幣の表(右)と裏(左)